

博士課程で培った能力

第一三共株式会社 テクノロジー本部 テクノロジー開発統括部

プロセス技術研究所 五十嵐 拓哉

1. 研究室で学んだこと

私は 2019 年に工学研究科応用化学専攻で博士号を取得した後、現在は製薬企業で研究職に従事しています。学部では明石満先生の研究室で松崎典弥先生のご指導のもと組織工学の研究に、修士・博士課程では茶谷直人先生の研究室で鷲巢守先生のご指導のもと有機合成化学の研究に取り組み、それぞれで専門性を深めることができました。特に博士課程では専門性はもちろんのこと、博士論文のテーマを考える上で「研究テーマの企画力と立案力」を身に付けることができ、また後輩の指導を通して「人材育成力」を、トライ&エラーを繰り返す中で困難な課題を乗り越えていくための「考察力と実践力」を身に付けることができ、研究室生活を通して私が社会人として活躍するための土台を築くことができました。

2. 社会人になって

現在は製薬企業で合成医薬品のプロセス研究に従事しています。プロセス研究では医薬品をできる限り効率良く、安定した品質で供給できる製法を設計することが求められます。特に合成医薬品では有機合成化学に関する深い知識と洞察力が必要とされるため、在学中に培った専門性を存分に活かすことができます。一方で、専門性だけを武器に社会で活躍することは難しく、私の場合は上述した3つの能力も合わせて発揮することで初めて活躍できているのだと感じます。会社では研究室と違って、高い研究遂行能力や処理能力が求められる場面は多い一方で、ゼロから発案する機会はそう多くありません。そういった中だからこそ、「研究テーマの企画力と立案力」が発揮できれば社内で一目置かれますし、自身がおもしろいと感じる研究にも手を付けやすくなります。また、博士課程を卒業して入社した場合は早々に部下を持つことになると思います。ここで部下を指導する能力が乏しければチームをうまく率いることができず、プロジェクトの失敗を招いてしまいます。博士課程で多くの後輩の指導に取り組んでいれば、その経験をもとにチームリーダーとしての業務にスムーズに移行することができ、その分チーム全体を成功に導ける可能性が高まります。さらに、会社では限られた期間内で成果を出すことが求められるため、1つ1つの実験の質を高めなければなりません。これには高い「考察力と実践力」が必要不可欠です。

博士課程でこういった能力を養い、職場で発揮できているからこそ、入社3年目で社内表彰されたり、入社6年目の今、誰よりも早く開発プロジェクトの研究リーダーを任されたりしています。もちろんこれまでの成果は私一人の頑張りによるものだけでは決してなく、研究室でご指導いただいた先生方、また入社後に面倒を見ていただいている上司の方々のお蔭であることは言うまでもありません。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

3. 今後の抱負

現在「産学連携」に興味があります。海外の製薬業界ではアカデミアとの共同研究を通して成果を挙げている事例を多く見かけます。日本でもそういった事例を増やし、産業界とアカデミアが協力して日本の研究力を引き上げていけるような働きかけや仕組み作りを企業研究者として進めていきたいです。

(応用自然科学科 応用化学コース 2014年卒、応用化学専攻 2016年前期修了、2019年後期修了)